



第52回和道会
全国空手道競技大会
高校男子団体組手 3位

三上冬馬(登米総合産業高1年、中田町駒牽)
藤原涼太(登米総合産業高2年、迫町山ノ神)
千葉良樹(小松大谷高1年、中田町仲町出身)
千葉宏樹(仙台城南高3年、中田町仲町出身)
佐々木裕輔(仙台城南高3年、大崎市出身)

写真左から、藤原、三上

全国で、強豪として名を轟かす和道会。昨年の世界大会、シニア男子個人組手84kg以下級で工藤開(現日本代表)が、カデット男子個人組手で千葉良樹がそれぞれ優勝している。和道会全国空手道競技大会高校団体組手では、一昨年は優勝、昨年は準優勝しており、今大会も活躍が期待された。

高校団体組手には、和道会がさまざまに所属し、県内外で活躍している精鋭5人でエントリーした。

1回戦は不戦勝となり、迎えた2回戦。オーダーは、先鋒千葉(良)、次鋒佐々木、中堅藤原、副将千葉(宏)、大将三上で臨んだ。実績、経験共に申し分ない二人を前に置き、勝ち星を先行させる作戦を立てた。

結果、先鋒勝利、次鋒勝利、中堅引き分け、副将勝利と、3-1で勝利。大将に勝負を回さない完璧な内容だった。迎えた準決勝、白水修養会(埼玉県)との対戦。相手は待ち主体の試合展開を得意とするチームだ。

先鋒千葉(良)は、相手が攻めてこないことから、フェイントなどで仕掛けるも崩し切れない。試合終了間際、焦れ

て攻撃に出たところ、カウンターの突きを入れられ、まさかの敗戦。痛い星を落とす。次鋒戦、ここを落とすと厳しく、絶対に勝ち星が欲しいところ。佐々木は開始から圧倒的に攻め込み、大差で勝利し、五分の星に戻した。

中堅藤原は「個人戦でも戦った相手との再戦。ここで取り返したい」と意気込んだ。先制するも、取って取られてのシーソーゲームとなった。同点で迎えた終盤。攻め込んだところ、相手の間合いになり突きを決められた。「分かっていました」と藤原は敗戦を悔やんだ。

後がない副将戦。1-2とリードをし、待ちの形を崩さない相手に、千葉(宏)がカウンターの突きを決められ万事休す。1-3で敗れた。

出番のなかった三上は「試合に出られなかったのは残念でした。しかし、優勝できなかったことが悔しいです」と振り返る。

「優勝できなかったのは残念ですが、負けたことはよい勉強。敗戦から足りないものに気づいたので、選手はうなづいた。」



写真左から、佐々木歩(3年)、菊地亜美(2年)、佐藤史織(2年)、大槻のりか(2年)、石川愛梨(3年)

佐沼高ボート部

全日本新人選手権大会
女子舵手付クォドルプル優勝
(佐々木歩、石川愛梨、大槻のりか、佐藤史織、菊地亜美)
男子シングルスカル 5位 佐藤 樹

全国高校総合体育大会
ボート競技
女子ダブルスカル準々決勝進出
(佐々木歩、佐藤史織、大槻のりか(補欠))

全国高校総合体育大会ボート競技は7月29日から8月1日まで、島根県雲南市さくらおろち湖ボート競技施設で開催された。

県大会を制覇し、初のインターハイの切符を手に入れた佐々木、佐藤、大槻の3人。県大会後の東北大会は、準決勝でわずかに及ばず順位決定戦へ。結果は6位と、納得できるものではなかった。

東北大会以降約2カ月間、インターハイでの目標である決勝進出に向けて、練習で徹底的に追い込んだ。

迎えたインターハイ。「いつも通り」を心がけた佐々木、佐藤。持ち前の粘り強いこぎで、予選を3位で通過。準々決勝に駒を進めた。

4チーム中、上位2チームが準決勝に進む。同じ組には、東北大会で勝てなかった西会津高校(福島県)が、「東北大会で勝てなかった分、ここでしっかり勝ちたい」と静かに闘志を燃やした。

準々決勝はスタート直後から、佐沼と七尾高(石川県)、西会津高が三つ巴のデットヒート。残り300mまで団子状態が続く。ここから七尾高が頭一つ抜け出す。すると西会津高もそれについてい



佐藤 樹(2年)

く。佐沼も追いつけるが、惜しくも3位でフィニッシュ。

「準決勝に進めなかったのは残念ですが、2人らしいこぎができました」と2人は笑顔で振り返った。

インターハイから約3週間後、本市のアイエス総合ボートランドで、全日本新人選手権大会が開催された。女子舵手付クォドルプルで優勝、男子シングルスカルで佐藤樹が5位に入賞した。

「インターハイに出場できず、悔しい思いをしました。このメンバーで優勝できたことは、これまでで一番うれしい」とクォドルプルでコックスを務める石川の言葉に、メンバーは笑顔でうなづいた。

男子シングルスカルの佐藤は「3位以内を狙っていたので、悔しい結果です。この悔しさは東北選抜大会で晴らします」と次に目を向けた。

来年に向けての戦いは、すでに始まっている。